

# Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.113

試 行 錯 誤



農村に嫁いだフィリピン人花嫁(撮影/今枝弘一)

## 特集 在日外国人と日本社会

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 在日外国人と日本社会 .....           | 2  |
| 地域に暮らす「外国人」をかながわから考える..... | 3  |
| 外国人花嫁の抱える問題とそのケア .....     | 8  |
| インドシナ定住者と教育 .....          | 13 |
| 寿・原宿・新宿をウォッチング .....       | 14 |
| 閉鎖が近づく難民キャンプ .....         | 17 |
| JVCにゆうす .....              | 18 |

## 在日外国人と日本社会

最近外国人の姿を見かけることが多くなった。数年前までと違うのは、建設現場とか食堂、居酒屋で日本人と混じって働く外国人労働者の急増である。その多くは不法就労と言って間違いないが、現在その数は15万人とも20万人ともいわれている。さらにここ2～3年南米からの日系人の出かせぎ労働者も急激に増え、10万人前後が働いている。自動車工場などの大工場で働く人が多く、日系人の場合、合法労働である。

このような日系人労働者とその他のアジア諸国からの不法労働者の圧倒的な数には及ばないが、日本の農村各地に嫁いで来た外国人花嫁さんも様々な波紋を投げかけている。これは、アジアと日本という関係においてのみとらえるのではなく、都市と農村という日本の社会構造の抱える問題を「花嫁さん」たちの小さな背中にかつがせていると考えなければならない。

### 定住難民支援から見てきたこと

JVCは9年前から日本に定住したインドシナ難民の支援を行ってきた。彼らの生活相談に乗り、日本語家庭教師を派遣し、さらには定住者自身の自主活動に対する支援も近年積極的に展開している。しかしその一方長い活動を通して我々が学んだことも多い。まず第一は、閉鎖的な日本社会にいやがうえでも気付かされたことである。定住者が抱える様々な問題を解決しようとする場合、必ずぶつかるのがこの壁であったと言ってよい。第二に、日本社会の異文化・異民族に対する無理解・無関心である。定住者と関わることによって彼らの持つすばらしい文化を知ることができたが、社会全体はといえば異文化を尊重するどころか、彼らに対して日本人への同化を有形無形に押しつけることで一貫している。インドシナの定住難民は日本全体でも7000人と非常に少なく、ほっておけばあつという間に日本社会にのみこまれてしまうだろう。定住者の中でも危機感強く、何とか伝統・文化を子供たちに伝えようとしているが、子供たちの日本人への同化は想像以上に早い。

このように定住難民支援の経験から学んだことと、

難民以外のニューカマー（労働者、花嫁さんなど）が我々に問いかけていることは根底に流れる問題は共通であると言ってよい。さらに、70万人と言われる在日韓国・朝鮮人や在日華僑などのオールドカマーの存在に対して私たちがいかに不勉強であったかを痛感させられる。たとえ定住難民を支援していくにしても、日本に住むマイノリティーという視点の中でとらえていかなければ、必ず行きづまってしまうだろう。

定住難民の場合、“難民”ということばのひびきからか、同情を集めやすいという事実は否定できない。行政によって対応は様々であるが、ある程度のケアも保障されつつある。一方、定住難民の中にもどう考えても出稼ぎに近いと思われる人が多いことも事実である。こうした中で、定住難民に限って支援をしていくことの根拠は徐々に薄れてきている。むしろ他の在日外国人に対する人権侵害や不当な差別の方が深刻な場合も多い。

### 第三世界の人々に支えられるニッポン

日本の現在の繁栄は明らかに第三世界の犠牲の上に成り立っている。日本軍の後を企業が経済侵略という形で引き継ぎ、近年はODAに代表されるように援助の名のもとに第三世界の特に底辺にいる人々を圧迫している。こうした構造の中で、多くの人々が日本に様々な形でやってきて、今度は日本人がやらなくなった3K労働によって日本経済の底辺を支えている。特に不法労働者に対しては各地で拒絶反応が起こっているが、わけのわからない外国人が増え問題が起きるのは困るということだろう。しかし、日本だけ豊かで平和であればよいという考え方は、第三世界に対してやってきたことを考えればあまりにも調子が良すぎるのではないだろうか。

在日外国人の問題は、まず第一に我々日本人自身の問題であり、さらに第三世界の国々と日本とのいびつな関係を無視して議論することはできない。本号は地域からの報告が中心となるが、こうしたことを考えていくきっかけとしたいと思う。

（岡村達司）

# 地域に暮らす「外国人」をかながわから考える

かながわ在日外国人問題研究会 榎井 緑  
(財)神奈川県国際交流協会 阿久澤麻理子

## ■かながわの外国人■

平成3年6月の神奈川県における外国人登録数は8万5千人を越えた。ほとんどの県内の市町村では、登録数の一位は韓国・朝鮮籍で、そのうちの多くは在日の人々である。しかし、それに追いつく勢いで急増しているのが南米籍の日系人労働者であり、自治体によっては順位が逆転したところもある。それ以外では、中国（在日中国人あるいは老華僑と新華僑）、インドシナ三国（定住難民）、フィリピン人（米軍基地のある自治体に非常に多い）の多い事が特徴である。もっとも外国人登録上は数に現れない外国人労働者を入れるならば、おそらく外国人住民の数は10万人を上回るだろうといわれている。

このように神奈川の外国人は在（定）住の歴史的背景、その期間も多様であり、それゆえに抱えている問題もさまざまである。しかし、個々の人々をきちんと見て行くと時間と共に推移する問題の質的变化なども把握しやすい。神奈川では1984年に行政として初めて在日韓国・朝鮮人の調査に取り組んだという積み上げもあり、新しい外国人の増加を考えるにあたって、まったく新しいこととしてではなく捉えて行くことができる。

### オールドカマー（古来人）

神奈川県とアジア世界の結び付きは古く、近代では開国以降に横浜・横須賀居留地に各国の人が生活し、中でも中国人労働者が特に多かったという。この時代に入って来た中国人は経済力を増し、横浜・中華街を中心とする相互扶助力の非常に高い華僑社会を形成した。また、明治の初めにペルー船に乗せられた中国人奴隷200人余りを県令大江卓が解放したことに象徴されるように、その受け入れは新しい社会形成の可能性を内包していた。

しかし、日本のアジア諸国の植民地化により、労働力として朝鮮人・中国人が内地移入され、特に京浜工業地帯の土木・建設や、相模湖のダム工事など、過酷かつ危険な作業に従事させられていた。戦後は、川崎南部に残った朝鮮人を中心として朝鮮人居住地

域が形成された。神奈川県ではこういった歴史的背景のゆえに、長く在住してきた人々をオールド・カマーと呼んでいる。

### ニューカマー（新来人）

#### ●中国帰国者

1972年の日中国交正常化以来、中国に残された孤児の肉親探しが始まり、県内にも現在約550世帯、2000人以上の帰国者が生活している。さらに中国の外貨獲得奨励のために、帰国者を身元保証人にしてその親族が日本に働きに来る傾向が顕著である。家族や一族数十人で来ることも多い。来日後は横浜中華街など言葉の通じる所で働くようであるが、子供たちは日本の保育園や学校に通っている。中国出身地で受けた教育程度によって、親の世代にも中国語の非識字者がおり、学校側からの情報の伝達が困難といった問題が起きている。

#### ●インドシナ定住難民

1978年に日本は難民受け入れを開始し、神奈川県にもカリタスジャパンの提供した大和市の土地に定住促進センターが建設された。約2700人という、県内のインドシナ定住者の数は日本の中でも一番多い。受け入れに際して1981年日本は難民条約に加入し、社会保障制度の適用が外国人にも広げられたが、この条約によって他の外国人住民にも制度の改正が波及した。

#### ●アジアからの「花嫁」

農村部の自治体幹旋などとは違い、都会にもアジアからの「花嫁」が増えている。恋愛結婚だけではなく、エンターティナーとして日本で働く内に知り合ったり、業者幹旋による結婚が多く、国籍もフィリピン、タイ、韓国、シンガポール、台湾、スリランカなど多彩である。言葉や習慣の違いから家族や地域からも孤立していることが多く、川崎や横須賀ではこういった花嫁を対象としたサークル活動や日本語教室などが行政や草の根によって始められた。

#### ●留学生、就学生、研修生

大学、短大、専修学校の専門過程以上の教育を受けるために滞在する留学生、技能習得する前提とし



て日本語学校で学ぶ就学生たちの多くは、自力で学費や生活費を賄わなくてはならず、サービス業などで働かせざるをえない。研修生は、技術訓練等を目的に企業が受け入れるものだが、一方で単純労働の隠れみのになっているとの指摘もある。

#### ●南米からの日系人

80年後半の南米での狂乱物価と、日本の人手不足が押し出し・引っ張り要因となり南米からの日系人労働者が増えている。特に昨年6月の入管法改正に伴い、違法労働者の雇用者罰則制度が設けられたため、合法的労働できる長期滞在のビザを持つ日系人を雇用する企業も増えた。県内では特に湘南地区や県央の自動車産業とその下請けのある所に集中している。興味深いのは一世の出身県とのつながりが強く、県人会の神奈川県支部が支援をしている場合があること、合法的に長期滞在できるように家族でくることが多いことである。

#### ●そのほかの外国人労働者

外国人の単純労働が認められないために、観光ビザで来日し働く外国人が増加している。県内ではとくに下請けなどの小規模企業、あるいは建設関係に多いが、日本人は言うに及ばず、研修生を呼ぶだけの手間もかけられないという所が多い。パキスタン、フィリピン、バングラデシュ、韓国、タイ、マレーシア、スリランカなどアジアが中心であるが、イラン、ガーナ、バハマから来た人々からも相談があった。違法滞在ということで様々な制度の適応を受ける可能性を閉ざされていることが一番の問題点であろう。

## ■来日直後から始まる緊急課題■

### 労働災害

来日後の期間が短い外国人にとっての最大の問題は、日本語がわからず情報から疎外されることである。これは単に生活上の不便に留まらず、しばしば命にかかわる問題ともなる。安全教育の内容が理解できない、あるいは「高圧注意」などの文字が読めずに労災に会う確率は高い。とくに不法就労の立場にある外国人労働者は労働基準法に反する待遇を受けていることが多いが、これは第三世界に進出している日本の企業が現地工場の安全基準を現地に合わせて日本よりも低くするという「ダブルスタンダード(二重基準)」とも共通する現象であり、これが日本の中の第三世界に対して行われているともいえる。

また、労災にあった場合でも、不法就労の外国人の場合は入管への通報を恐れたり、事業主が労働基準監督署の立ち入り調査や雇用者罰則制度の適用を恐れて労災補償の申請を妨げている。労働省から出された平成元年の「部内限」通達では、労働基準監督署は救済を第一とし入管へは通報しないという方針が述べられているが、昭和63年の局長通達を見ると、これが厳密に行われているとは言い切れない状況である。また、労災適用の申請が認められても、完全治癒までの日本滞在や、後遺障害の帰国後給付体制が整えられていないという問題がある。現在鶴見区にある(社)神奈川労災職業病センターでは、フィリピン人が建設現場で労災に遭い、脊椎損傷になったケースに対して、帰国後補償の問題に取り組んでいるが、私たちの知る限り、これが唯一のケースである。

### 医療

外国人住民には日本の医療制度に関する情報が行き渡っていない。また、受診の際の言葉の問題も大きい。医療の通訳は、命に関わる問題でもあり、ボランティアベースだけで対応できる問題ではない。また、言葉のみならず宗教や習慣といったものへの対応も問題となっている。

保険制度が適用されない短期滞在者や外国人労働者は、医療費の問題から病院に行かず、買い薬を飲み続けて重症になったりする例が少なくない。また、急病や重症の患者が病院にかつぎ込まれても、医療費の負担をする機関はない。というのも厚生省からの見解により、オーバースティの外国人には生活保護の医療扶助が出なくなったからである。民間の外国人労働者支援団体も苦勞して病院などとのネットワークづくりを進めているが、いくつかの病院にケースが集中したり、また病院での医療費の焦げ付きが問題となっている。

#### ケース1：あるフィリピン人の出産

これは外国人の医療に関して、まったく「出口のない」と思われたケースである。Eさんはエンターティナーとして来日し、ビザが切れた後もオーバースティで働き続け、妊娠した。妊娠がわかった後も日本に滞在を続けていたが、体調の不調を訴え続け、6カ月目に早産をしてしまった。子供の体重は1,000グラムあまり。緊急に子供を専門とする県立病院に入院となったが、体の器官が未熟であり、脳にも障害が残る可能性が高い。問題は彼女とその子供の医療費の問題である。オーバースティで



外国人登録も行っていないので、国民健康保険には加入していない。毎月かかる約300万円の医療費は現在県立病院の負担となっているが、病院としては県立でも経営的には独立しているわけだから、これもいつまで続けられるかわからない。

いわゆるオーバースティの外国人の医療費は、生活保護の打ち切りがあってからは、社会福祉法人の病院で低額診療制度に頼る事も多くなっているが(社会福祉法人の病院は、年間、医療費の払えない患者をある程度低額で診療する代わりに税制上の優遇措置を受けられる)、このように専門の病院でないと対応できない場合は、病院を変えるわけにも行かない。また、何らかのきっかけで彼女が入管に通報されれば強制送還の対象になった場合、子供の診療がどこまで認められるだろうか。(普通は飛行機による旅行が可能になったと認められた時点で送還される。)

しかし、問題は制度上ばかりのことではない。というのも、彼女の子供の父親が誰であるのか、日本人であるのか、本人にもまったく特定できなかったからである。もし父親が日本人であれば、認知請求を行い、それによって医療費なども請求ができる可能性があるのだが…。事情もあるだろうが、自分が出産すること、子供をその後育てることに限ってはやはり本人ももっと考える必要があったのではないかと、とも思う。

#### ケース2：割礼の話

パキスタン人のAさん夫婦に子供が生まれた。二人はオーバースティのまま日本で働き続けるうち知り合って日本で結婚した。問題は子供の生まれたあとに受けさせる割礼である。イスラム教では生後何日までに子供に割礼を受けさせるといったことが厳しく決められている。出産した病院の泌尿器科の医師に相談したところ、割礼自身は手術としては非常に簡単なものだし、文化的にも大切な習慣だろうから、と理解を示してくれたが、病院がカトリックの病院だということで、理事会にまでかけられた上で断わられてしまった。東京などでは以前から住んでいるイスラム圏の外交官などの家族のために、割礼をしている病院もあると聞きつけ、連絡をとった。しかしこんど問題は費用である。これは医療行為ではなく、しかも新生児の手術なので点数が非常に高いのである。一回の割礼には、7～8万円がかかるという。そこで今度は開業医をあたってみたが、割礼の方法がわからないという理由や、医療行為でないからできないと断わられてしまった。

結局10件以上の医療機関をあたってが、対応してもらえず、なんとこの夫婦の友人であるパキスタン人が自分

の手で割礼をしてしまった。何事もなかったで胸をなでおろしているが、やはり医療機関でやってもらえればそれにこしたことはなかったと思う。しかし、日本で暮らす外国人が、どこまで自国の伝統をそのまま持ち込むことが可能か、ということはかれら自身も検討の余地がありそうである。たとえば、費用の点などは妥協の余地があったのではないかと。

#### 自治体による「パンフレット」づくりに思うこと

ここ一年ほどの間に、多くの自治体が、多言語による「くらしのガイド」やパンフレット類を積極的に出したり、多言語による「外国人相談窓口」を設置した。もちろん日本に暮して間もない外国人にとって、母国語によるインフォメーションは必要である。しかし、情報を翻訳したり、機関を紹介するだけでは実際に使えないことも多い。リスト上の機関が外国語で対応できないこともある。また相談窓口の設置場所、あるいは時間帯(休日や夜間には開いていない)によっては利用しづらいという指摘もある。

また多言語で情報を出すという短期的解決ばかりでなく、自治体は今後の長期的視野のもとに立って、外国人の社会参加を真剣に考え始めなければならないと思う。教育や福祉制度の整備とともに、地方選挙への参政権、公務員の国籍条項の問題などがすでに在日韓国・朝鮮人住民にとって重大な問題となっているのである。実際ニューカマーに対する対応が非常に進んでいるとおもわれる自治体でも必ずしも在日韓国・朝鮮人への政策が進んでいるとは言えない。

また、産業構造の根本的解決なども課題である。大企業と無数の下請け、孫請けという構造そのものが外国人労働者に危険な労働を強いているのである。こういった視野がなくては、本当の内なる国際化や共に生きる社会の実現はむずかしいのではないだろうか。

#### ■長期的な取り組みの必要性■

滞在が長期化すると、問題は緊急性を持つものからその質を変えて行く。子供は学校で急速に日本語を吸収し日本人化してゆく一方、日本社会で苦勞をしてきた親たちは、その苦勞を子供にさせたくないと考えて、あえてそれを許容するむきもないではない。そのため世代間に大きなギャップが生まれて来る。インドシナ定住難民の家庭では、これは深刻で

ある。母語や母国の文化を忘れていくことは家庭だけではなく、コミュニティにとっても深刻な問題である。

日本の教育制度の中では、外国人児童に対する日本語指導は積極的に行われるようになったが、まだ母語や民族的なアイデンティティ保持のための教育は整備されていないのが現状である(注1)。県、市町村教育委員会では、外国籍児童や帰国子女(インドシナ定住難民・日系人・中国帰国者)について、より多くの教員や補助教員(非常勤)を配置する予算をとっているが、主として日本語指導、教科補習、あるいは日本語のわからない親とのコミュニケーションのためである。しかし、中には学校や補助教員が裁量の範囲で意識的に子どもたちが母語や母国の文化に触れる機会をつくっている場合もある。

日本の公立学校でこういった取り組みがあることは、非常に重要である。というのも彼らが自らのアイデンティティに誇りをもって学ぶ場は、彼らだけではなく日本人にも共有されるべきだと考えるからだ。外国人問題を作りだしているのは日本人なのであり、私たちの側が彼らの文化を尊重する姿勢を持つことが重要だからである。そういう意味では、外国人の子供たちの母語やアイデンティティを保障する教育は、対日本人教育の場でもある、といえよう。こういった教育を受けた子どもたちは新しい文化を担う世代となるだろう。

しかし、インドシナの児童は定住が長いので日本語に不自由はなくなったとの判断で、行政からの補助教員配置予算がカットされるケースも起き始めている。日本語教育だけで終わらせてしまうのではなく、これが母語教育の制度づくりの転換点とはならないものだろうか。

また「補助教員」という立場に対しても議論がある。補助教員は日本語と子どもたちの母語ができる人材が非常勤待遇で採用される。そのため定住の長い同国人の補助教員も多い。「補助」であるから、正式の教員免状をもっているかいけないかということにとらわれず良い人材をいかせるという長所もあるが、公立学校教員の国籍条項の問題を考えれば、やはり正式に採用するべきではないか、との意見も強い。外国籍の児童が増えれば、これは「補助」というよりはもっと積極的な制度にしてゆかねばならない日も来るだろう。

さらに、母語を教えることの意味ももっと議論されるべきだと考えている。母語はアイデンティティ

の形成にとって不可欠かもしれないが、一方西ドイツのように帰国奨励対策の一環として行っている場合もある。教育に限らず、「外国人」の日本への社会参加がどうあるべきなのか、がとわれる場面でもある。

次に社会教育の現場でのユニークな取り組みを紹介したい。

### ケース3：綾瀬図書館

綾瀬市は大和市に隣接するため、インドシナ定住者が多く住む地域である。その綾瀬市立図書館で今年の9月より、ラオス語図書35冊を設置することになった。綾瀬市図書館は本の貸出以外にも、市民向けの国際理解講座を開催するなどしている。また図書館のある市の複合施設内の文化センターでは市民グループによる日本語教室やラオス人たちが自分たちの子供たちを対象とした母語教室なども開催されている。

設置される図書は、民間の海外協力団体である、曹洞宗ボランティア会がタイのラオス難民キャンプで印刷したものである。同会はバンビナイ難民キャンプ(ラオスからの、とくに少数民族の難民のキャンプ)で、印刷プロジェクトを行ってきたが、印刷は職業訓練という技術的な意味あいを持つと同時にまた、彼らの文化を保持してゆくための手段ともなっている。難民自身からの聞き取りをした民話をまとめたり、ラオスの歴史、音楽に関する本、あるいは教科書、他国に定住したラオス難民のその後の話、新聞などが印刷されていた。今回、綾瀬図書館に設置されることになった35冊はこのなかから、綾瀬に定住するラオス人のレックさんが選んだものである。ラオス本国から取り寄せるのではなく、NGOの印刷したものを設置するのはなぜですか、と訪ねたところ次のような答えが返ってきた。

「ラオスは共産化してしまって、教科書の内容もみんな変わってしまいました。だからそのままの本では子供たちに本当のことが教えられないのです」

これらの本の存在に気づいた地域の日本人住民に、どんな波及効果があるのかもこれから興味深いところである。

## ■「外国人」問題をめぐる視座■

### 地方からの発想

「外国人」の問題を考える時、よく「受け入れるべきか、否か」という議論になるが、どちらにせよジレンマに陥ることは明らかである。受け入れ派は日

本の中で人手不足と世界規模の経済格差の中での外国人労働者受け入れは必然的であると主張するし、反対派は外国人を単純労働に就かせるのは、日本が第三世界の資源だけでなく人をも収奪していることだと指摘する。また、西ドイツのトルコ人労働者の事例を挙げて、外国人労働者の定住に伴う社会問題を危惧する声もある。しかし、これらはいずれも日本という国家の大枠のレベルから論じているにすぎず、日本国内のさまざまな格差や社会構造を見る視点を欠いている。

先日、山形県のある町のフィリピン人「花嫁」とその家族と話す機会があった。自治体主導でアジア人花嫁を迎えた事に対し、日本人が経済力で過疎対策のために女性を買った、という批判もあるが、実際町を訪れてみて、単純に日本人がアジアから搾取している、という観点からはこの問題は論じられないという印象を持った。

日本の中の、都市に対する地方（農村）の問題は、第三世界の北の国々に対する関係と非常に似ている。農村部の嫁不足は、都市資本の肥大化による過疎や若者の流出に端を発している。そうした、日本国内の歪みがしわ寄せされた部分に「外国人」が流入しているのだ。また一方、彼女たちはよりよい生活を日本に夢み、また家族への送金などを望んで嫁いで来た。世界規模の構造的な問題の中で、問題を抱えたもの同士が出会い、生活し、葛藤しているという現状が、目の前にあるような感を抱いてしまった。

おそらく、日本人が日本の社会構造とその問題を認識し、解決してゆくことが「内なる国際」への最も近道ではないのだろうか。第三世界との連帯は、決して都会型の発想だけでは実現できない。日本人が日本の問題にきちんと直面して行くことが大切ではなかろうか。

#### 「外国人問題」をどれだけ自分に近づけられるか

元来、移民の国として成立しているアメリカでは、居住歴などの一定の要件を満たせば、権利として永住権や国籍が取得できる。また、アメリカ生まれの子どもたちは両親が不法滞在であろうが、アメリカ国籍を取得できる。このような社会システムの中では「外国人問題」は自国民の中のマイノリティーの問題へと切り替えられる。日本では外国人である限り、二世になっても三世になっても外国人であることには変わりなく、そのためいつまでたっても外国人問題は外国人問題として日本人から切り放して論

じられてしまう。しかし、こういった状況のなかでどの様にしたら日本人が外国人問題を自分の問題として捉えることが可能になるのだろうか。

アメリカでは今、出生率の低下や高齢化社会から労働不足の時代を予見し、マイノリティーを雇用できなくては国がつぶれる、といった議論まで出てきている。そこでマイノリティーと言われる少数民族や女性、高齢者、障害者などの差別を積極的に是正し、能力を開発していくことが社会全体にとって必要なことだ、との認識に立って、アファーマティブ・アクションと呼ばれる積極的な差別是正措置がとられている。（注2）

もう一つ興味深いのは、アメリカの公民権運動の中でのマイノリティーとは、黒人、ヒスパニック、アジア系及び太平洋諸国人、アメリカインディアンとアラスカ先住民、白人（ヨーロッパ、中東、北アフリカ等の出身）などといった分類だけではなく、女性、障害者なども含まれているということだ。公民権とはまさに、民族的マイノリティーの問題だけではなく、さまざまな市民の権利を含む運動なのである。他の立場の人々の権利を考えるためには自分の権利にも敏感でなければならない、ということではないだろうか。

もちろんこれが単純に日本に適用はできないことを認めた上で、なおかつ参考にしたいと考えている。日本の「外国人」問題を考えるとき、私たち自身がまず自分の権利をきちんと捉え直すことが、外国人の人権を考える第一歩ではないかと思うのである。そうしてこそ外国人問題は本当に自分の問題として認識できるようになるのではないだろうか。

注1）神奈川県では川崎市教育委員会が「川崎市在日外国人教育基本方針～主として在日韓国・朝鮮人教育～」を（1986）、また横浜市でも同様の教育指針を制定した。

注2）これまで差別されて来たマイノリティーは、社会的、経済的、文化的なハンディを負っているため、単に平等な参加の機会を提供するだけでは競争から脱落する可能性をもっている。そこで真の平等を実現するためには結果の平等を重視し、ある一定期間これまでの差別により被った不平等を補償する意味から、一定の資格を持ったマイノリティーを教育や住宅、労働の分野で優遇していく措置である。



# 外国人花嫁の抱える問題とそのケア

山形大学精神神経科医師 桑山紀彦

## 外国人花嫁の置かれている状況

外国人花嫁の急増への対処は、わが山形県最上郡における重要課題である。今すぐに何とか、というわけではない。しかし、確実にその数は増えており、様々な問題が発生しつつある。そこには「国際結婚」の持つ積極的な意味合いはなく、「嫁不足」に始まり「農村の過疎化」に直結する複雑な問題に帰結する。さらにこれは日本の地方、特に農村部の精神性や文化が、危機と混迷の中に突入しつつあることを示唆する重要なサインでもある。わたしはこの現状を報告するとともに、現在、そして今後の活動についての報告を行いたい。

実数は91年3月末日のデータによると以下の通りである。

### ①最上地域外国人登録者…240名

- ・山形県全体の外国人登録者が512人であるので、その約47%が最上地域に集中している。(ちなみに山形県は村山地区、置賜地区、庄内地区の4地区に分けられる)
- ・ブラジル人はそのほとんどが労働者である。
- ・中国人は「中国残留孤児」及びその第二世の家族である。
- ・韓国、フィリピン人はそのほとんどが外国人花嫁である。

### ②最上地域国際結婚状況…78件

- ・これはあくまで、最上国際交流センターに届けられた実数であって、実際には戸籍上に登らない潜在ケースが多い。

### 結婚にいたるまで

次に婚姻までのルートだが、大きく分けて「行政主導型」と「民間仲介業者型」がある。

#### ①行政主導型

これは大蔵村がその代表である。大蔵村は1984年より、フィリピン、ルソン島のある町と友好関係を結び、何人かの日本人男性を連れて、集団お見合いの形をとって機会を作った。以来現在までの7年間

で12人が大蔵村に嫁いでいる。来日後も、村役場が先導してフィリピンとの交流を全面に出し、この国際結婚を積極的に捉えようとしている。

#### ②民間仲介業者型

これは金山町、真室川町の韓国人花嫁の大半に相当するケースである。最上地区の中核をなす新庄市のある冠婚葬祭業者が独自で行っているものである。約200万円から250万円という金額で、韓国の花嫁を紹介するものだ。めばしい人物が決まると、その日本人男性を連れて韓国へ飛び、引き合わせる。そしてさっそく現地で簡単な結婚式を行い(費用は約50万円相当のもの)新婚旅行をセッティングする。それが終わると観光ビザで来日してもらい、とりあえず最上郡の実家で暮らす。1〜2カ月が過ぎて何とかやっていけそうだと分かるといったん花嫁は帰国し(観光ビザがきれるので)、しばらくしてから再来日する。そして山形でも結婚式をし(しないケースがほとんどと聞かすが)、入籍する。そして長期滞在の1年ビザを取得し、以降1年ごとに更新していく。(行政担当者によれば、この民間仲介業者の取り分は多額で、結納金として花嫁に渡されるべきお金もいわゆるピンハネしているのがほとんどであるとのことである)

### 家庭環境の問題

家庭環境は最も問題を内在させている部分である。

#### ①夫婦関係

総括して論じられるものではなく、各家庭ごとに特徴はあると思われる。その中でも、一般的に言うことは、言語的コミュニケーションがほとんどの場合成り立っていないことであろう。まず夫は妻の母国語を話さないし理解できない。もちろん妻の母国文字も読めない。従ってどうしても日本語によるコミュニケーションが必要になるが、妻側は全く日本語を学習せず来日するため、夫婦間の会話は成り立っていないといってよい。筆者が経験した例では、

Trial & Error No.113



言語をよく聞くと、そのはしゃぎ声に、日本語ではない、タガログ語のイントネーションが含まれているようだった。何気ない語りかけが子供に内に生き、姑や夫の気付かないところで、外国人花嫁の母国語が伝えられている様に思われた。これが、子供の成長と共にどのような発展を見せるのかは今の時点では明確でない。しかし将来的には重要な課題であろう。

### 文化の問題

次に周辺環境及び宗教について述べる。

#### ①フィリピン人花嫁の立場から

周辺にフィリピン文化の寄り所となるものはほとんどない。新庄市内のキリスト教教会が、日曜礼拝やクリスマス、イースターのお祝いを行っていて、戸沢村のフィリピン人花嫁もこの教会に通っている。

フィリピン人花嫁の傾向として、花嫁同士の横のつながりを大切にすることがあげられるが、大蔵村、戸沢村の両村では、週に一度開かれる日本語学校が花嫁同士の交流の場となっている。しかし、家族の病気や残業といったいろいろな事情によってその出席率は低下する傾向にある。そんな場合でも電話連絡などは緊密で、各地区にリーダー的存在の花嫁が必ず一人は居り、その人物を中心に情報交換や悩み相談などが行われている。



もし自分一人では解決できないような悩みごとが発生した場合は、おもに役場の振興課の主査や保健婦に電話が寄せられる。しかし、これらは行政が関与した見合い例に限られ、そのほとんどが行政関与のフィリピン人花嫁の場合は良いが、逆にそのほとんどが民間仲介業者関与の韓国人花嫁の場合は、問題発見が遅れる傾向にある。

#### ②韓国人花嫁の立場から

周辺に韓国文化の寄り所となるものはほとんどない。漢字文化という共通点はあるが、なまじ近隣国であるという意識が日本人側にもあるために、それがかえって無理な要求を花嫁さんにする原因にもなり、全く違う文化圏であるフィリピン人花嫁の方が、かえって周囲の歩み寄りはあると思われる。

伝統的な儒教文化を色濃く残す地域から嫁にきた人が多く、そのため、韓国人花嫁は家長制度を身を持って学んでいる。しかし、今やほとんど家長制度が崩壊してしまい、姑が君臨する母系家族となった日本人家庭に入って、韓国人花嫁はその環境の違いに大きく戸惑う。

- ・何故、決定権が義父でなく義母(姑)にあるのか。
- ・自分の夫はこの先本当に家長になれるのか。

といった疑問を抱く花嫁は多い。

宗教的には現時点で主だったトラブルなど報告されていない。

## 精神科的ケアの現状と展望

現在われわれは「異文化外来」という枠組みで、こういった在山形の外国人の精神障害に対応しようとしている。しかし、その受診数は決して多くない。それはおもに次の点によると思われる。

- ・「精神科」を受診させることに対する、家族の抵抗感。本人の抵抗感。
- ・その大半が神経症レベルで、おもに身体的不調

を訴えるため、内科、整形外科、産婦人科を受診している。

- ・精神科受診例を見てみても、ほとんどが一過性のパニック発作を起こす例で、ほぼ一晩で治まりその後の治療が必要とされない場合が多い。

しかし、現実には離婚例なども発生しており、一過性とはいえパニック発作を起こす花嫁も増加の傾向

にある。総じてこれらは家庭内不和がその原因であるが、お互いの無理解や情報不足、誤解といった「修正可」の要因が関与しているのもまた事実である。

そこでわれわれは「言語」「心」「文化」の3本柱を基幹に、その中の「心」を担当しながら外国人花嫁の精神衛生に取り組んでいる。

## 言語の柱

### ①日本語学校の整備と充実

現在、大蔵村に二つ、戸沢村に二つ、鮭川村、金山町、真室川町持回りで一つの日本語学校が運営されている。しかしそれらがカバーしているのは外国人花嫁の約25%に過ぎない。

大切なことは、われわれ「心」を担当するものとの連携である。精神的な不安定さの多くを「日本語が話せない」という事実が占めている。従って、われわれの外来受診をする人も、何割かは日本語学校に紹介して、しっかりとした日本語教育を受け、またその教室内での交流を通して周囲とのつながりを作っていくことで、安定した状態を維持できることも多い。

### ②通訳ネットワークの整備と充実

身体や心の訴えを、まだ良く分からない日本語で行うのはそれだけでストレスである。従って、自分の訴えを聞いてくれて、日本語に訳し医師に伝えてくれるような通訳が望まれる。現在韓国語で二人、中国語で一人、電話通訳の登録をお願いしている。一回500円相当のお礼をし、日本語がうまく話せない患者さんへの対応を行っているが、行政の予算化はない。

## 心の柱

### ①巡回相談

91年9月22日に最上地域の中核都市である新庄市で、内科、小児科、産婦人科、整形外科、精神科の5科による、無料健康相談を行う。これには母国語で相談が出来るように各科に通訳を立てる。先日、新庄市に住む外国人労働者に結核の空洞形成が発見され、こういった外国人対象の通訳付き無料健康相談の必要性を改めて認識した。

同じく8月30日、韓国人花嫁の多く住む金山町で健康相談が行われる。筆者は医師としてそれに参加するが、その際、彼女たちの抱える悩みごとと相談を受け付ける。「精神科」を全面に出すのではなく「医

師」として、身体、心、文化一般にまつわる悩みごとを、保健婦さんと一緒に考える。

この二つは何れも行政が予算付けを行っている。

### ②心の相談連絡協議会

現在、大蔵村、戸沢村、金山町との間で実行している。おもに保健婦さんと地域振興課の役員と精神科医が集まり、現在進行中のケースについて話し合う。8月20日、戸沢村役場で行い、在村の韓国人、フィリピン人花嫁とその家族で対処に困惑しているケースについて話し合った。他市町村とも定期的に開いていくつもりである。

### ③FAX通信「心の健康相談カード」

緊急性を要する場合などに用いる問診表及び、その回答をFAXで行うものである。

### ④通常外来での対応。そして他科との連絡

現在、分裂病の男性の元に嫁いだ韓国人花嫁が、臨月で県立新庄病院に入院中である。夫は不安定になり、妻も「韓国に帰る」と言い出している。とりあえず、入院し様子を見ているが、産婦人科の主治医との連絡をとりながらこのケースは進めている。

## 文化の柱

### 料理の会

外国人花嫁さんをやみくもに日本に同化させるのではなく、お互いの文化の「融合」を目指して行われる交流事業である。別名「食卓の文化交流」と呼ぶが、韓国料理の会やフィリピン料理の会を敢えてあからさまに開くことによって、自分たちの村に外国から花嫁がたくさん嫁いでいることを認識してもらう狙いがある。ともすれば日本人側の隠したがる傾向の中に、花嫁は埋もれ、様々なストレスを受けている事が伺い知れる。まずは受け入れた日本人側の意識改革を進めなければという点に立つ事である。

しかし現実にははかばかしくなく、韓国人花嫁をもらった家のケースだが、「あそこは村役場が関わっていない、民間業者が呼んだ花嫁だから、あんな人と一緒に料理なんか作るな」と、家族に反対され、出席できない場合も相次いでいる。フィリピン人花嫁の場合は減多にないが、こと韓国人花嫁の場合は、花嫁本人にも妙な差別意識が働くこともあり、こう言った「集まって何かする」といったことが出来ない傾向にある。

JVCの国内プロジェクトとしての関わりは持てないものだろうか……と思うこの頃である。



# インドシナ定住者と教育

おい じ あきら  
生地 陽

インドシナ定住者の教育についての経験を振り返りながら、今後、外国人の増加と多様化の中で日本社会に何が求められるかを考えていく。

周知の通り、インドシナ定住者が日本に暮らし始めて15年以上が経過した。この間に子供たちの教育はどのような問題に直面してきたのであろうか。

まず最初に直面し、優先的に対応されてきたのが、日本社会への適応のための教育である。定住促進センターの訓練の他に行政やNGOの活動が様々な形で行われてきた。しかし、まもなく、日本で育つ若い世代が母国語を忘れて行き、日本語が完全でない大人たちとのコミュニケーションが困難になるという新しい問題が生じてきた。日本で生まれてくる世代がふえる中で母文化保持の問題がクローズアップされてきたのである。

## 母国語教室

幼い頃に日本にやってきた子供、日本で生まれた子供たちが母語と文化を忘れて行くことに、大人たちは危機感を持っている。その思いを知るエピソードとして、昨年10月末に、神奈川県大和市下和田でひらかれた「ふれあい下和田」というイベントがある。カンボジアの少女がお母さんたちの指導で、はじめてカンボジアの民族舞踊を踊った。「この子供たちは一生この踊りを踊ることはないだろう」と考えていたお母さんたちが上演中に涙ぐんでいたという。

母語、母文化の学習の場として日本国内の居住地区を中心に定期的にインドシナ出身者の子弟を対象にした母国語教室が開かれている。神奈川県綾瀬市の綾瀬ラオス語教室のスタッフの一人シンカムタン・レックさんに最近の様子をうかがった。教室は8人のスタッフで週1回2時間開かれている。内容はラオスの国の話、ラオス語の読み書き、ラオスの風景を絵に描くこと、民族舞踊などである。ほとんどの子供はラオス語がわからないので、説明は日本語で行う。そして、どんどん質問してもらうという形式だ。

ところが、当初23人いた生徒は約8人に減少している。理由の一つは教室から遠い所に住む生徒がやめてしまうことだ。普段通う学校の他に、遠距離を

休日通学することはやはりたいへんなことなのだ。

レックさんは、週1回だけのラオス語教育は語学教育としては十分ではないが、自分たちがラオス人であるという意識を持つようになることについては効果があると話している。マスコミが取材に来たときに、子供たちが「みなさんは何人ですか？」と尋ねられて、みんな「ラオス人です」と答えたとき、うれしそうに語った。

一方、ここ数年、日本の公立小中学校では、日本語の習得が十分でない児童、生徒を対象に日本語指導学級を開設している。専任の担任教員と母国語の話せる教育協力員（相談員）が対応している。その目的は対象児童生徒が日本社会に適応することにあるため、日本語の指導が終われば指導も終わると考えられやすい。しかし、4年前に開設された先駆的な存在の大和市の下和田小学校国際交流学級は、当初の日本への適応、日本語指導の考え方から母文化の維持へと指導の中心を移してきている。その理由は、外国籍生徒の多くが日本生まれのインドシナ定住難民子弟であるため、日本語指導が必要な児童は現在数名しかいないということと母国の文化を持つ彼らに対する母国語教育は個性を生かすという見地からである。

下和田小国際交流学級担当の伊達重明先生は母語、母文化についての学習は日本人の子にもプラスになり、彼らのためだけにやっているわけではないと語った。また、母国語の授業といっても、月に1～2回しか相談員は来ない。勉強しようかなと思わせる程度である。子供たちは日本に適応しきっている。しかし、母国語学習のチャンスだけは与えたいと考えている。

紹介した二つの教室の母国語教育に共通することは母国語教育が民族の自覚を促すための教育であって、必ずしも母国語をマスターすることが期待できないことだ。

## 日本人化を希望する若者たち

このような母文化を伝えるための活動が活発化してきた背景にはインドシナ定住者を受け入れた日本社会の問題があるようだ。

いったい日本人はインドシナ定住者に対してどのように接しているのでしょうか。あからさな差別事象は少ないように思える。たとえば、前述の伊達先生は、「はじめのころは色が黒いからプールにはいるなどと言われたこともあるが、今は外国人がいるのが当たり前になっている。また子供たちも外国人という意識を持ってないで暮らしている」と語った。逆に配慮しなければならない場面で対応が出来ないところもあるくらいだという。そして、他校で外国人だからという事で、特別扱いされて、他の子なら怒られることを見逃されたりされて育ってきた外国籍の児童は、下和田小学校へ来て戸惑うことが多いという。

外国人だから特別扱いして、悪いことをやっても見逃しているということは何を意味し、若者たちにどのような影響をもたらすのか。

ラオス人の若者について、シンカムタン・レックさんは次のように語った。ラオス人の子供たちは小学校5～6年から高校生くらいになると、一見して「外人」とわかる親たちと外出しようとしなくなる。学校の保護者懇談会にも来ないでほしい、友だちに恥ずかしいからという。ラオスの料理を食べない子供もいる。10世帯のラオス人の家庭のうち、2～3世帯しかラオス的生活をしていないのではないのか。バイト先や塾で、日本風に名前を変えてしまうラオス人もいる。

このような事象は、もちろん、思春期の子どもに特有の気持ちも原因であろう。しかし、ラオスの若者が必死に日本人化しようとしていることの現れともとれないだろうか。

ラオス的生活をしている少数の家庭ではきびしい教育をしている。料理を食べなければ怒るとか、ぶつつかして子供たちはラオス語も上手になるという。しかし、逆に言えば、それだけ厳しくしなければ親の文化を保持できないということであろう。

インドシナの若者たちは、日本人の微妙な偏見を感じとっているように思う。そして、日本人化を希望する。ラオスの若者がラオス的な生活を捨て、名前を隠したり、親が学校に来るのを嫌ったりする。そこで、大人たちは民族の自覚を持つための教育の必要性を唱えている。

#### 民族教育の問題点

インドシナ定住者の子供たちの教育について、大きな問題は、「何人」として育てるかということである。

ある。日本文化に触れていない祖国の人と全く同じように育てることはほとんど不可能だ。一方で、日本人に同化しきることは出来ない。民族のアイデンティティが何によって形成されるか、あるいは同化に対する考えが各グループ、家族、個人で異なる。そして、民族についてのイメージが浮かんでも、そのためには何をしなければならないか（どのような知識、態度、感情を育てたら良いのか）が議論されなければならない。そのうえ、民族教育をめぐるさまざまな困難がある。

その1つはどのような場でその教育をするかという問題だ。日本の学校に通学する子供たちをバイカルチュラルな人材に育てようとしたら、日本の学校の学習と同時に母文化の学習を両立させなければならない。その負担に耐えられる子供は少ないのではないだろうか。

その負担を軽減するためには民族教育の内容を公教育のカリキュラムの内容として認めたり、公教育に参加できる形に民族学校の地位を高めることであるが、日本の学校制度ではそのような検討は始まったばかりであり、現時点では多くの困難がある。

在日韓国・朝鮮の人々や中国系の人々は民族学校を建設し、保育所から高等教育までの体系を持っている。しかし、日本の民族学校は制度上多くの制約を受け、また弾圧を受けた歴史がある。他の外国人の民族学校が今後日本社会に誕生しても同じような制約が及ぶ可能性があり、困難さは以外に大きいかもしれない。

もう一つの問題は、誰が民族教育を行うかという問題である。その民族グループの人口規模が小さければ、民族教育に必要なスタッフや資金の確保が困難になるのではないのか。70万人以上の人口規模を持つグループには大学までの教育体系を運営できても、地域的に分散した約1000人のグループにそれは可能であろうか。アメリカのインドシナ定住者が雑誌を発行したり、母語放送を運営したりできるのは、受け入れ国の環境だけでなく、人口規模の問題もあるのではないだろうか。

今回の考察から在日外国人の子供たちの教育について、インドシナ定住者の経験から示すことが出来るのは、同化の社会的圧力の強い日本社会で民族教育の必要性が定住開始から十年程度で高まったこと、そして、その内容、実現のための方策（制度、人材の確保、運営方法）を真剣に考える段階がすぐに来るということである。

# 寿・原宿・新宿をウォッチング

JVC 神奈川代表 岡村達司

横浜・寿町6:00 AM — アジアの言葉が飛びかう街

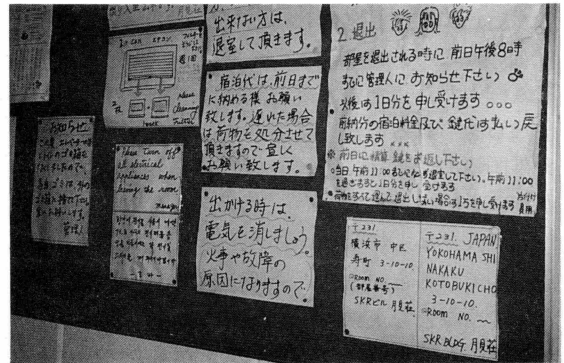
JR 石川町駅は中華街の玄関口となる駅である。駅から海に向かって元町、中華街、山下公園と横浜で一番華やかな一帯が続く。夜遅くなると中華街のおみやげを手にしたほろよいかげんの観光客が駅構内にごったがえし、切符を買うのも大変だ。

しかし、宴の後といった感の早朝は、昨晚と本当に同じ駅なのだろうかと疑うくらいに霧意気は一変する。ひと目見て建設作業の労働者とわかる人たちが改札はあふれんばかりだ。たいてい何人かのグループで、そのうち一人が行先を書いたメモを手にしたが路線案内板を見上げている。朝の石川町はこれから建設現場へ向かう労働者の出発駅である。

石川町駅から海とは逆の方向に約5分行くと日本三大ドヤ街の一つ、寿町にたどり着く。駅をはさんでこれほどの陰陽が対照的な所も珍しい。夕方寿町にやってくると街じゅうに漂う酒の臭いが鼻につく。今日仕事にありついて稼ぎを手にした者が一杯ひっかけ、仕事にあふれた者は、まあ朝からずっと飲んでいるのだろう。寿町は飲み屋の多いこともさることながら、目をみはるのは酒・ビールの自動販売機の数である。アルコール依存症はこの町のかかえる最大の問題と言ってよい。

朝6時、寿町が一番活気づきいきいきと見える時だ。千人はゆうに越える群衆がドヤの中心である職案週辺にあふれる。めし屋や新聞屋、作業着や軍手を売る露店のかき入れどきでもある。皆が手にしているのはビールやワンカップ酒でなく、缶コーヒーだ。こうして見ると日焼けした労働者の頬はキリッとたくましく見える。いい仕事を取ろうとする目は真剣そのもので、あたり一帯に湯気がたちこめるような熱気だ。孫受け建設会社のワゴンが何十台も並び、人員を確保すると勢よくエンジンをふかし飛び出していく。

しばらくこの景色をながめっていると、フィリピン人が多いことに気づく。ざっと100~150人ぐらいが寿に寝泊りしているという。小さなグループにいくつも分かれて情報交換に忙しい。リーダー格の者が



あっせんブローカーとの交渉を行い、話がまとまるとワゴンに乗り込んでいく。

フィリピン人労働者が他とちがうのはその服装だ。フィリピン人は衣装にこだわるとよく言われるが、作業着が主流の寿界わいではそのファッション感覚は群を抜いていると言ってよい。まっ白なTシャツにGパン、えりを立てたジャンパー、金のネックレス、きちんと整った口ひげ等々。フィリピン人労働者の大きな特徴は、その多くが高学歴であることだ。3K現場での彼らに対する評価は極めて高い。

フィリピン人は顔つきが日本人と違うのですぐわかるが、次第にフィリピン人よりも韓国労働者の方が多いということに気づく。あちこちから聞こえてくる会話が日本語ではないのですぐわかる。寿を拠点にしている韓国人は約800人でフィリピン人の数倍にもなる。さらに、もし日本人である場合、ここには若い者はまずいないと言ってよい。見るからにたくましい働きざかりといった感じの者はまちがいに韓国産であろう。

ドヤというのはヤド(宿)をひっくり返したことばで、その名の通り何十軒もの簡易宿泊所が立ち並んでいる。入口をのぞくと、たくさんの注意書きがはってあるが、たいてい英語、ハングル語等の3カ国語で対応をしている。たくさんあるコインランドリーやコインシャワーも様々な異邦人たちにきめ細かく対応している。地域のこうした反応は、寿に限らず、行政の何倍も素早いのが何ともおかしい。露店のおばさんも外国人労働者とのかたことのやりと

りを楽しんでいる風でもあり、笑いが絶えない。「タカイタカイ」「ノーノーだめネ」と身ぶり手ぶりの値引き交渉が続く。この寿という町は案外異邦人に対して、少なくとも外の社会よりは暖かいのではないかと思う。弱い立場に置かれた者同士で通ずるものがあるのかもしれない。

商談も外国人労働者の場合、お金という目的がはっきりしているため、酒におぼれることもないのでもっきりして見える。古参の労働者は酒が目的となってしまう者も多く、高齢のため元気な外国人労働者に圧倒されてしまっている観がある。

寿は日本の高度成長時代に地方からのたくさんの出稼ぎ労働者で大きくなっていった。そして日本が成長を遂げ、日本と他のアジアの国々が中心と周辺という関係になることによって、今度は大量の外国人労働者の町となった。

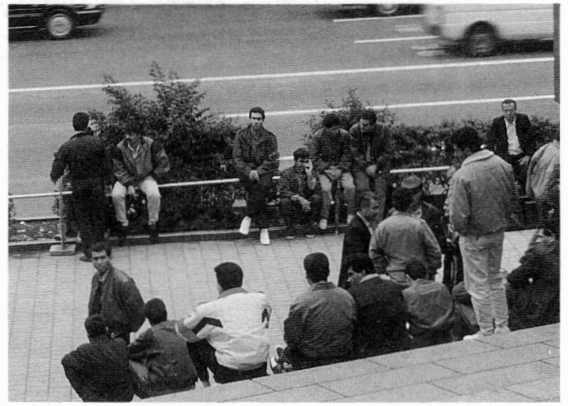
現在、寿の日給は10,000～15,000円、ドヤの宿泊代は一泊1,000～1,500円である。

#### 原宿12:00——歩行者天国のイラン人たち

原宿駅に降り立って改札に向かう人の流れに、もう何人かのイラン人がいることがわかる。彼らは皆ためらわず代々木公園に向かう。話には聞いていたが、公園に近づいて前に広がる光景にびっくりしてしまった。入口付近から中にかけて、いったい何百人のイラン人がいるのだろうか。日曜日で天気もよく、これで酒盛りでも始まったらどれくらいことになりそうな気がするが、彼らは禁酒を戒律とするモスリムである。日曜祝日は代々木公園とその横の歩行者天国には千人から多い時で2千人ものイラン人が集まってくる。この付近の森の中で寝泊りしている者も多いらしく、公園のトイレは洗面やヒゲの手入れに余念がないイラン人に占領されてしまっている。

彼らのほぼ全員はツーリストとしてやって来たことになっているが、彼らは労働者である。イランとは日本とビザの相互免除協定を結んでおり、3カ月以内の滞在なら自由に入国できる。このことが、イランからの労働者の急増の大きな理由となっている。母国で借金するか、ブローカーに手配してもらうかして日本に来る。入国審査で滞在能力を示すための「見せ金」は、通関を終え出口を出たときに待っていたこちら側のブローカーに回収されるというシステムもあるそうだ。

1990年度に来日したイラン人は約3万2千人。公園で寝ているのを日本人に何と思われようと、日本



でひと稼ぎすれば、母国では成功者となる。

この付近には、イラン人ほど数は多くないが、中国人やパキスタン人のグループもたくさんある。代々木公園は都心にあって広大な緑が続くとても美しいところだ。休日には着飾った日本の若者もどどどくり出す。一方、日頃の3K労働から解放されたアジアの人々も同胞を求めてほうぼうから集まってくる。日本の若者は自由を満喫しているかのように見えるが、それとは対照にイラン人や中国人は不安げだったり、真剣に情報交換を続けている。物質的な繁栄を享受し続ける日本社会と、「不法」という不安定な立場ながら日本経済の底辺を支えている外国人労働者という構造を、ひと目で理解させられる光景だ。

#### 新宿21:00——日本語が共通語

つい最近機会があって、新宿へ飲みに行った時のことだ。いっしょにいったのはタイ人二人とパキスタン人一人で、皆いわゆる不法労働者である。タイ人の一人の方とは、海老名の小さな日本語教室へ話を聞きに行った時以来のつきあいだ。6月に来日しもう一方のタイ人といっしょに住んでいて、パキスタン人青年はたまたまとなりの部屋に住んでいるとのこと。片言の英語しか共通語がないにもかかわらず、オレたちは親友だと言いあってえらく楽しそうだった。

親友同士ではあるが、お互い何を言っているのかわからないので、オマエが通訳しろと言う。その後延々とパキスタン人の上手な日本語を下手なタイ語で通訳するはめになり、下ネタばかりなのでうんざりして少しこちらからも仕事の話を3人に聞くことにした。

タイ人二人は重くて熱い鉄製品を運ぶ仕事で、腕のあちこちに火傷の跡がある。パキスタン人の方は



もう日本に2年ぐらいいろいろ知っているらしく、何とかユニオンの組合員証というものをを見せて、二人のタイ人にもしきりと加入を勧めていた。入会金は2000か3000円で、外国人労働者のための組合みたいなものだそうだ。外国人労働者が一人で労災認定を申請していくことは非常に難しいが、そのような場合このユニオンが雇用主との交渉に大きな力を発揮する。

私たちの入った居酒屋には店内を走り回る従業員が20人ほどいたが、そのほとんどがバングラディッシュ人だった。今さらながら驚いたが、いっしょにいたパキスタン人の青年は、東京の居酒屋ならどこでもこんな風だと一笑に付されてしまった。

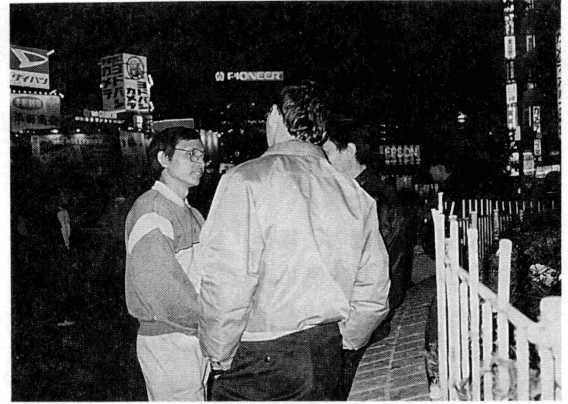
手の空いたバングラディッシュ人の店員が、こちらの顔ぶれを見て不思議に思ったのか、しきりに話しかけてきた。皆でワイワイ言いあったあげく、全員の唯一の共通語は日本語だということがわかった。二人のタイ人は日本語はまだよくわからないようだったが、パキスタン青年とバングラディッシュ青年のよどみのない日本語会話を聞くのは何とも不思議な気分だった。

ここで働くバングラディッシュ人の日本語はかなりのものである。メニューの数は百種以上もあり、「もずく酢」とか「ねぎまとすなぎもを塩で」といった難しそうな注文にもびくともしない。聞くと、一応皆昼間は日本語学校へ行っているという。

寿町に来る孫受け建設会社の場合もそうであるが、役所に提出する従業員名簿には外国人名を書けないので「山田」とか「伊藤」という日本人名で登録されているとのこと。そういえば、ネームカードをつけるような店では、こうした外国人労働者の胸にも日本名をつけさせているという話はよく聞く。島国根性のうえに人権感覚の薄い日本ならではの現象と思えるが、働いている本人たちはまあしょうがない、どうでもいいという感じだ。こちらが心配する以上に彼らはずっとたくましくしたたかだ。

パキスタン青年は大学を出ていて、かなり裕福な家庭の出身だった。2年近くの間200万円以上稼いだが、最近パチンコに擬って50万円くらいすってしまったという。「もうパチンコはしない。ぜったいもうからないよ」と、しきりに反省していた。貯めたお金は故郷ラホールで衣料品店を開く資金にするといい。

タイ人二人はタイ東北部の出身で、かなり借金をして来日したらしい。「工場で働いたり、運転手をし



たりしていたが、家族が多くて食べていけない。とりあえず100万円貯めたい。子供を何とかして大学まで行かせたい」と一人が言った。

パキスタンでもタイでも「黄金の国ジャパン」の話は神話といてもいいぐらいだ。家を建てたり、レストランを開いた成功者の話はあっという間に広がっていく。タイでは日本のビザを求めて毎日1000人以上が大使館に列を作る。二人のタイ人も朝4時ぐらいから並んだという。

日本のビザの有効期限は3カ月。ほとんどの者が期限を超えて1年から2年滞在する。3カ月過ぎた時点で不法就労に不法滞在が加わる。お金を目標まで貯めると入管に出頭する。帰りのチケットは自分で支払えるので“優良強制送還者”として凱旋帰国していく。

4人ともビールジョッキ3杯ずつ空け、すっかりほろ酔い加減だ。

「ところで、お前はイスラム教徒なのに何で酒を飲むんだ？」

「あとでアラーの神にお祈りするから大丈夫だよ」

「あれ、今食べているのは豚肉だぜ」

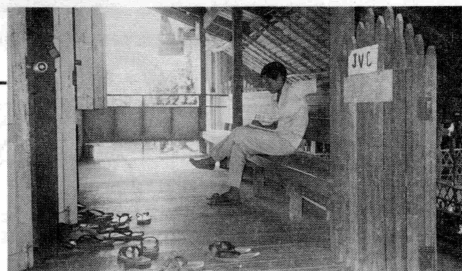
思わず口に入れたものを出しそうにしたパキスタン青年のあわてぶりに大爆笑がおこる。

「こんな調子で日本で飲んでいるとお金はたまらないよ」と言うと、「うーん、でも日本でこんなに楽しかったのは初めてだ」「今度はいつがいいかなあ」と調子がいい。とうとう“摘発されなかったら1カ月後に”という変な約束をさせられた。こちらは摘発よりもケガの方が心配だが、3人はいかにも陽気だ。国で食べていけないといっても、とことん追いつめられたという感じはない。日本に出稼ぎに行ける余裕があるだけまだ恵まれているといつてよいだろう。今ではすっかり東京の風景にとけこんでいる3人の姿に複雑な感情を抱きながら新宿を後にした。

## 閉鎖が近づく難民キャンプ

JVC日本語学校機関誌“fromパナ”より

いむた  
蘭牟田 浩美

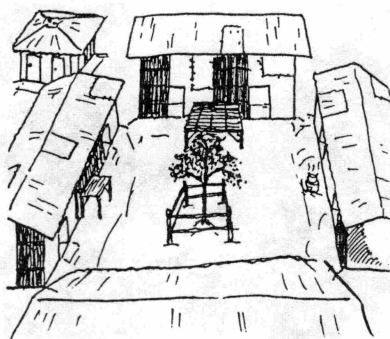


パナニコムキャンプは日増しにさびしさが漂いはじめてきた。人口がどんどん減ってきている。

ベトナム難民は、3月のデモンストレーション以降、それまではパナニコムで受けていた難民資格認定審査をシキューキャンプで受けなければならなくなり、第三国定住のために必要な難民の資格を得るには、いやでもシキューへ移動しなくてはならなくなった。そこで資格を得れば、第三国への定住のためもう一度パナニコムへ戻ってくることになる。すでに6000人以上がパナに移動している。戻ってくる数は2割にも満たない。残りの人たちはベトナムへ自主帰還するか、そのままシキューで暮らし続けていくしかない。少しずつだが、ベトナムへ帰る人も出てきているようだ。

クメール（カンボジア）の帰還プログラムもこのところ急に動きはじめ、11月にはUNHCRが帰還者受け入れのためのセンター設置可能地を調査に、カンボジア国内に入る。早ければ来年1月にも帰還が始まるとの話もある。

山岳民族を含むラオス難民も、1994年までには全員本国帰還させるという方針が出され、タイ・ラオス両政府とUNHCRの間で積極的に会議が行われている。この8月には、カナダ、フランス、アメリカ、オーストラリアなどの受け入れ国が、バン・ナポーキャンプへ出向き、今後定住のための受け入れをしないことを通達するようだ。



もちろん日本政府も足並みを揃える。毎日新聞から目が離せないめまぐるしい動きの中で、日本政府は6月に、クメール難民約90人、7月にラオス難民約150人に定住受け入れのためのインタビューを行い、12月には再度クメール難民に対しインタビューする予定である。すでに100人近い数がリストアップされている。すべて親族の呼び寄せケースではあるけれど、本国帰還へと向かう流れの中で、これだけの多くの人を定住受け入れさせていくことに奇異の目を向ける人たちも少なくない。

パナニコムキャンプ内でも、次々と閉じていく他団体をよそに、JVC日本語学校はこの秋から200人以上の生徒を抱えることになる。これが最後、これが最後という日本政府の発言もだんだん頭に留めなくなってしまった。

JVCの高床式の教室の下でハンモックをつるし涼んでいた、トタン塀を抜け出してきた20～30人ものベトナム人たちも、ここ最近監視が厳しくなり、一人もいなくなってしまった。買い物に抜け出て兵隊に見つかった何人かが、JVCのまわりをよく追いかけてこしている。

JVCの横にある、シキューへ移動して行ったベトナム人たちの残した廃屋には、屋根と柱しか残っていない（出て行く時にこわしていった）。そこへ日本政府のインタビューを受けるためにナポーから移って来たラオス難民たちが、毛布やビニールシートを打ちつけて壁を作り住み始めた。何か殺伐としたものを感じる。

昨年の11月にナポーから移送され授業を始めた生徒たちも、6月からやっと日本に山発できるようになり、9月には何とか半数を見送れそうだ。

この秋に定住許可を受けるラオス、クメールの難民たちもどれだけの間パナニコムで待たされ、日本への出発を迎えることができるのだろうか。



## ベトナムから 福祉関係者が来日

JVCは、1990年からベトナム南部ホーチミン市で、ろう学校や夜間中学への支援活動を実施しているが、今回そのホーチミン市から支援対象のヒーボンろう学校のビン校長先生ほか3人の訪問者を招いて、日本国内の福祉施設を訪問し、あわせてベトナムの現状とJVCの活動を訴えた。

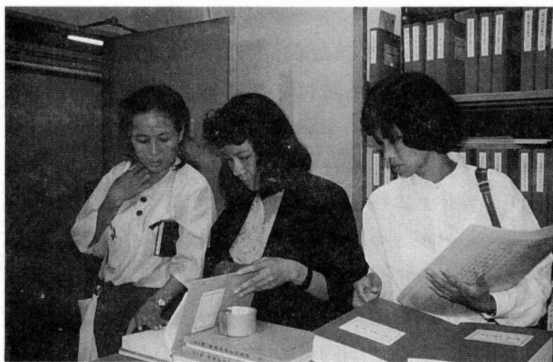
9月12日に来日してから2週間、東京都内や関西の福祉施設を中心とした訪問先を次々見学し、その間東京と大阪で報告会に出席するなど、ハードスケジュールをこなしていただいた。同行した者にとっても、普段なかなか訪問する機会のない国内の福祉の現状に接することができ、大変勉強になった。

受け入れ準備のためにボランティアの人たちと話し合った段階から、日本とベトナムでは社会状況があまりにも違うために、訪問者にとって今回の訪問

が本当に役に立つだろうかとの懸念があった。実際、ビンさんたちも立派な建物や高度な機器が整備された施設を見て戸惑いをみせていたが、障害者が一般の人の中で働いている町田市の施設や、男女半々のスタッフがおとなの障害者を対象に働いている奈良の施設など参考になる点も多かったと話していた。

最後に、訪問者を快く受け入れて下さった各施設の方々と、準備から同行まで献身的に係わって下さったボランティアの方々に改めてお礼を申し上げた。

(山口誠史)



れを忘れさせるほど、木々の力強さに感動した。

マーシャでの活動は、雨不足や害虫による作物の被害の大きいコレブ地区への緊急救援から再び開始される。それと並行して、いままでもJVCがやっていた農村復興プログラムの農村への影響を整理しなおし、農村社会への適切なアプローチの仕方を農民と共に考えていく。村の中で今、何か動きだそうとしている。マーシャでの新しい活動にご期待下さい。

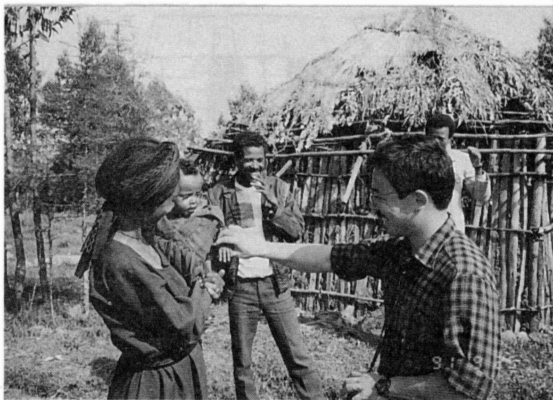
(江原浩昭)

## マーシャ村 再び

「ガシュ、ソロモン。デナスタリン(こんにちは)」植林サイトを見に行く途中で出会う農民が我々の姿を見かける度に声をかけてくる。目の前に目標が見えているにもかかわらず、なかなか先に進めない。

91年7月、2年ぶりにマーシャ村を訪れたJVCを農民が総出で出迎えた。一人一人と挨拶をするのに半日かかった。雨期の始まりを告げる雨が台地をたたき、農民たちも畑の準備を始めた。「これからは自分たちがやろうとすることができる」17年にわたった前政権が崩壊したことで、農民の中にも自由を喜ぶ雰囲気と意欲が生まれてきた。

JVCのコンパウンドから歩いて3時間、標高3千メートルを越える所にある植林地を見に行った。2年前にはまだ小さかったユーカリが、山の斜面にしっかりと根を張り、大きく成長していた。3時間の疲



再会を喜ぶスタッフと村人たち

## カンボジアをめぐる動き

今年6月、タイで開催されたカンボジア最高国民評議会（SNC）は、無期限停戦、外国からの武器援助受け入れの停止、SNCの運営方針、選挙法、新憲法の原則を検討するための作業部会の設立など次々と成果を生み出した。そして9月には、各派の軍備の縮小、国連安保理における同評議会の承認など、カンボジアは着々と和平に向かって進んでいる。

### 変化するNGOの役割

80年代初め、数えるほどしかなかった各国のNGOも今では60団体に及ぶ。当初NGOの大きな役割の一つは、国際的に孤立したカンボジアの現状を西側諸国にアピールすることであった。そして今カンボジアは、国際社会に受け入れられようとしている。

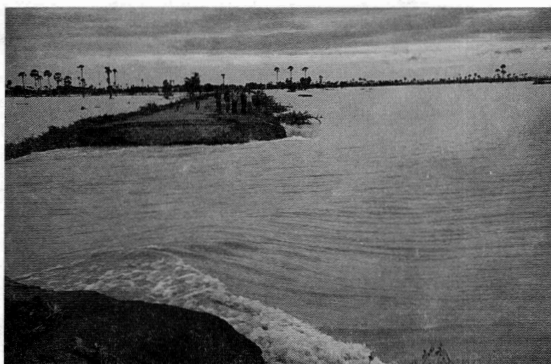
このような時代の流れの中、今後期待されるNGOの役割は、タイやフィリピンと同じように、経済中心の社会とたち向かう農村の人々の声を国際社会に伝えていくことである。そういう意味で、今まで以上に地域に入りこむ努力が必要となる。

今年で5年目を迎えたJVCのプロジェクトも、“より地域に”入るべく、日々の活動を進めている。母子保健のプログラムは、88年に始まった郡レベルのライセンセンターを拠点に、村レベルの診療所の機能の充実と建て直しを行っている。また、井戸掘りについても、これまでの大がかりな機械掘りから住民参加型の、小規模な手掘り井戸、ため池作りへと移行している。

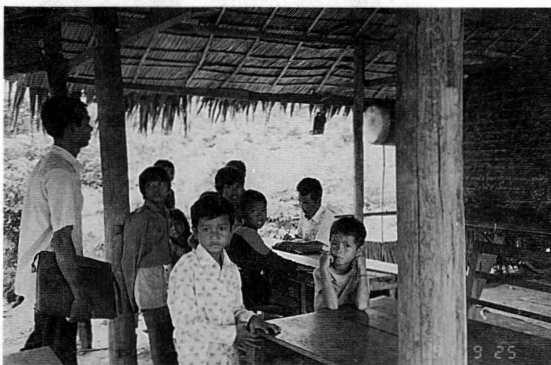
### 着々と準備が進む難民帰還

カンボジアと平和への大きなステップである難民帰還の準備が、国境の両側でそれぞれ進められている。難民を送り出すタイ側では、帰還先の希望調査が行なわれ、全体の運営を行うUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）では、もうすでにその手段やルートを決めた。

一方難民を迎えるカンボジア側でも、一時滞在のためのレセプションセンターの設置場所を決定し、まもなく着工するところまで来ている。さらに、そこからの輸送、運行についてもNGOと共同で実行するために、活発な話し合いが進められている。



洪水によって寸断された道路



避難民キャンプ内の学校

JVCとしても、プノンペンでやってきた車両整備のプロジェクトのノウハウと、そこで育成した人材を生かすためにも、ぜひ輸送車両の維持・修理の部分で協力したいと考えている。

### カンボジア南東部の洪水

8月19日夜から20日未明にかけて、集中豪雨によるメコン川の急激な増水によって洪水が発生。また、これにともなうダムが決壊、道路の破損等により被害が広がっている。特に深刻な影響を受けたのは、カンポット、コンボンチャム、コンボンスプー、タケオ、カンダール、プレイベン、クラチエの7県と首都プノンペン郊外である。各県によって被害状況が異なるが、合わせて5万世帯、20万人の人々が家をなくし、また、約20万ヘクタールの耕地に影響が出ている。

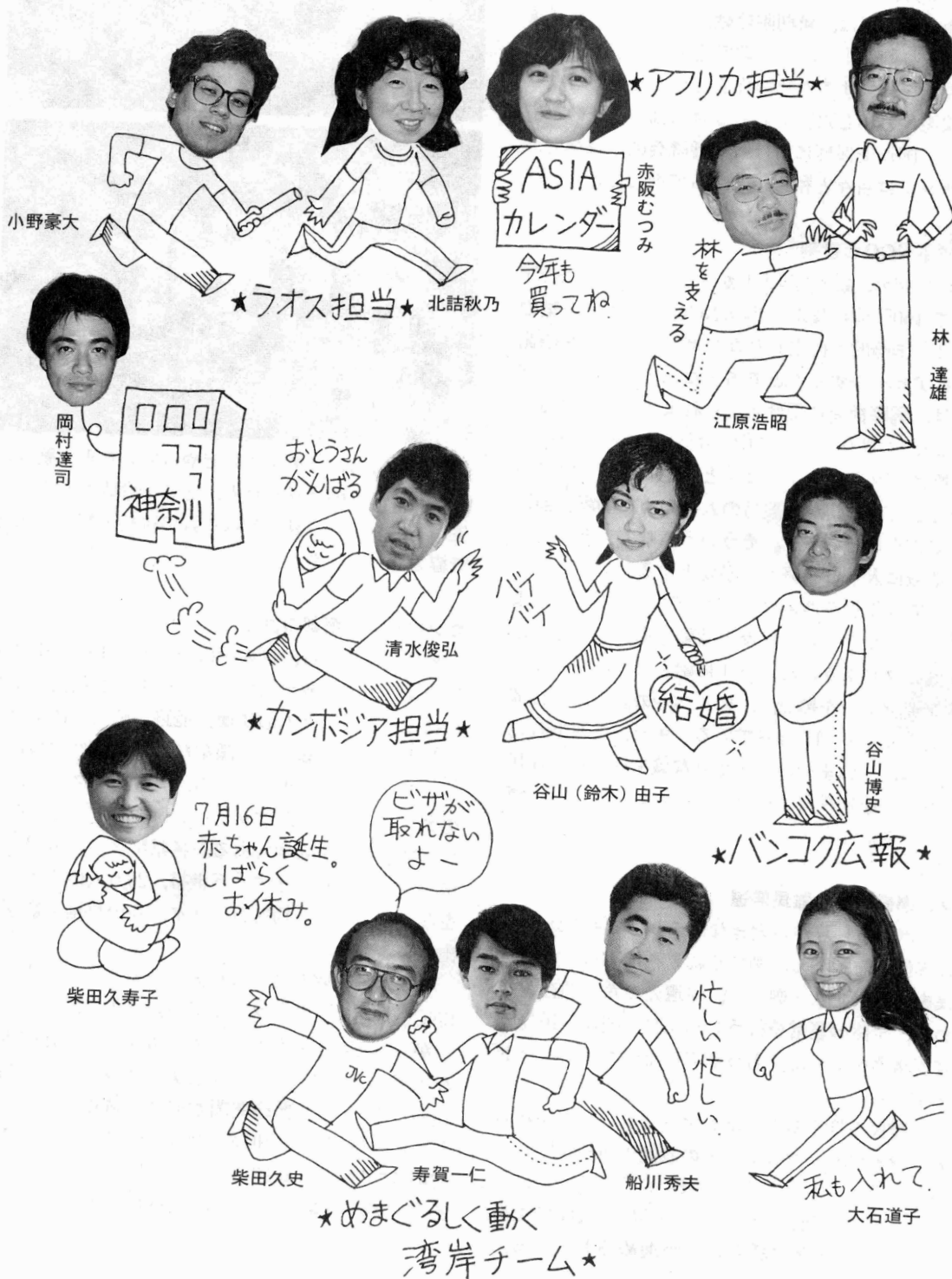
この状況に際して、外務大臣のホーナムホン氏とSNCを代表してシアヌーク殿下から対外的なアピールがそれぞれ出された。また、カンボジア保健省、赤十字、各県当局、そして在カンボジアの民間救援団体、WFP等の国連機関が対策を講じた。JVCとしても食糧配給の分担金3000ドルを提供し、今後の対応については検討中である。現在は水位も下がり、各地で道路の補修などの復旧活動が進められている。

（9月26日 清水俊弘）



# JVCオフィスはいま……

4月から9月までのスタッフの動き



# JVCプロジェクト

1991年 8月25日現在

| 活動地名                          | 活動内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                   | 担当者                                                                                                                                       | 支援団体                                                          |
|-------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|
| <b>東京本部</b>                   | <p>渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。</p> <p>機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行。</p> <p>JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～8時<br/>毎月第2、4土曜日 午後2時～4時</p>                                                                                                                                                                        | <p>岩崎駿介（代表）<br/>林 達雄（事務局長）<br/>熊岡路矢、星野昌子、<br/>前川昌代、山口誠史、<br/>鈴木由子、今泉 恵、<br/>富安光子、富安庸太郎、<br/>柴田久寿子、小野豪大、<br/>江原浩昭、赤阪むつみ、<br/>高梨直樹、北詰秋乃</p> | 全国社会福祉協会                                                      |
| <b>JVC神奈川</b>                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>7月27日「ベトナム・カンボジア報告会」（熊岡路矢）</li> <li>8月17日「エチオピア報告会」（江原浩昭）を行った。</li> <li>8月25日、エチオピア支援バザーを市民防災センターで行い、来場者数500人、収益金約124万円と盛況であった。</li> <li>10月20日の“チャリティーウォークかまくら”に向けて本格的な準備が始まった。</li> </ul> <p>●定住難民プロジェクト<br/>クメール語ニュースレター今年度第1号を、ボランティアのリム・ナロンさんを中心に作成した。</p> | <p>岡村達司</p> <p>岡村達司、他約50人</p>                                                                                                             | <p>ジャパン・タイムス、神奈川県福祉部、禅林寺龍華会基金、ケアハウスさくら苑、明るい社会づくり運動神奈川県協議会</p> |
| <b>環境</b><br>タイ<br>(チャイャブーン県) | はげ山の斜面にレモングラス、バナナなど手に入りやすい植物で土留めをし、その間に果樹、スパイス、陸稲などを植えた。                                                                                                                                                                                                                                               | 岩崎美佐子、Komain Soongsumalaya, Kasemsan Sriwattana, Prasit Ingo, Chalaem Kaewchoho Somrak                                                    | 庭野平和財団、YOKE イオン財団                                             |
| <b>調査・研究</b>                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>東南アジアの森林破壊と換金作物についての研究</li> <li>人間居住キーワード辞典の作成</li> </ul>                                                                                                                                                                                                       | 東村康文                                                                                                                                      | FASID 国土庁                                                     |
| <b>イラク</b>                    | <p>6月には、医師をバスラ、バグダッドに派遣し、医薬品援助をするとともに医療状況を調査した。また、神奈川県との協力により水道技術者2名をバグダッド、ヘラ、ナジャフへ派遣し、水道施設を調査した。</p> <p>現在は6月の調査結果に基づき、医薬品、粉ミルク、塩素等の援助の準備をしている。</p>                                                                                                                                                   | 柴田久史、船川秀夫、寿賀一仁                                                                                                                            | 全日本自治団体労働組合（自治労）、神奈川県800万県民による湾岸戦争被災民等への支援募金、テレジア会、           |

| 活動地名                                                                         | 活動内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   | 担当者                                                                                                                                                      | 支援団体                                                                                                                                            |
|------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>エチオピア</b><br><br>東ゴジャム州<br>ビチエナ<br><br>ショワ州<br>ゴディノ<br>ダロチャ<br><br>アジスアベバ | ● <b>マーシャ村復興プロジェクト再開</b><br>内戦のために約2年中断していたマーシャ村での農村復興活動の再開が決定した。マーシャを含んだ4カ所での調査の結果、一番援助を必要としていることと農民の自発的な意欲が芽生えていることなどからマーシャを選んだ。現在、エチオピア人スタッフを中心に、農村の状況把握、役所との交渉を行っている。<br>10月の初めに日本からも関係者がエチオピア入りし今後の方針、活動の具体的内容を決める。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               | 山田 盛, 田尻真由美,<br>Solomon, Shikur,<br>Ali, Yodit, Tekleyohannes, Burahane,<br>Amudu Gabreamruk<br>Baieye                                                   | CRDA, WFP,<br>犬養道子・みどり一本運動,<br>モラロジーMIRC,<br>立正佼成会, 西本願寺, 東京グリーンウォーク,<br>メサイヤコンサート, エチオピア支援バザー,<br>ほか                                           |
| <b>ベトナム</b><br><br>ホーチミン市<br>ハイフォン市                                          | ● <b>地域総合復興(南部)</b><br>2年目に入り, ①第8区の障害児童のための活動, ②居住環境の改善のための活動, ③ビンチャン郡における移動保健医療活動の調査計画に参加している。あわせてホーチミン市および南部における帰還民へのプログラム実施のための調査を行っている。<br>● <b>地域総合復興(北部)</b><br>洋裁, 電気のコースは各々第2期に入り, 自動車修理のクラスは9月に開講する予定である。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    | 熊岡路矢, 中野周二,<br>稲見 圭, 稲見由美子,<br>久保英之, 久保早恵<br>〔南〕<br>ホーチミン市住宅局<br>第8区人民委員会/社会福祉<br>〔北〕<br>ビンチャン郡人民委員会<br>ハイフォン市労働局                                        | 〔南〕<br>庭野平和財団<br>立正佼成会<br>メサイヤコンサート, JVCカレンダー<br>〔北〕<br>UNHCR                                                                                   |
| <b>カンボジア</b><br><br>プノンペン市<br>カンダール県<br>バンティエン<br>チェイ県                       | ● <b>サンタビエップ技術学校/ワークショップ</b><br>日本からもってきた自動車整備の教科書のカンボジア語訳が進んでいる。上巻をバンコクで印刷・製本して第四期コースの開始に備える。第四期は91年9月より開始。学科・実技の両方の訓練を受ける生徒を25人, 学科のみの受講生を15~20人を募集する。<br>● <b>母子保健</b><br>カンダール県内7郡及び県都の村々の助産婦・伝統産婆の技術向上訓練を続けている。妊婦検診により, 出産時に異常が予想される妊婦を早期に発見できるようにするための訓練である。<br>プノンペン郡で合計12カ所の村の診療所を改築する。既に4カ所で着工し, その内1カ所で完成した。<br>● <b>井戸・ため池作り</b><br>プノンペン郡で川や湖が近くにない深井戸も掘られていない村を選び, 村人の手による浅井戸やため池作りを助ける。古い浅井戸でセメントリングが壊れたり, 穴が石などで埋まってしまったり水位が下がって水が涸れてしまったりしたものを修復する。<br>また, 家畜の進入を防ぐための柵がなかったり, 池の水をきれいに保つための手入れができていないため池を使えるようにする。古い浅井戸やため池もない村では, 新たに掘る。<br>● <b>国内避難民への緊急援助</b><br>カンボジア北西部バンティエンチェイ県シソボン郡に戦火を逃れて避難している人々が稲作ができるよう助ける。6月に40ha分の浮き稲の種まきに必要なる費用を援助した。 | 古西 勇, 馬 清,<br>本橋 栄, 竹井潤子,<br>飯島かんな, 鈴木琴子<br>大西睦美<br>「現地の実施機関」<br>自動車輸送公社(運輸省)<br>母子保健局(保健省)<br>カンダール県保健委員会<br>プノンペン群保健事務所<br>バンティエンチェイ県<br>国内避難民委員会(農業省) | 創価学会青年平和会議, モラロジーMIRC, 立正佼成会, 日産労連, 西本願寺<br>高岡寺族青年会<br>毎日新聞大阪社会事業団, 浄土宗東京教区青年会, 国際保健協力市民の会(SHARE), 四日市商業高校, JVCカレンダー, カリタス・ジャパン, 真如苑, メサイヤコンサート |

| 活動地名                                                         | 活動内容                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  | 担当者                                                                                                                             | 支援団体                                                                                                                     |
|--------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>ラオス</b><br>ビエンチャン市<br>ビエンチャン県<br>ボーリー・カム<br>サイ県<br>カンムアン県 | <ul style="list-style-type: none"> <li>●生活改善普及員養成プロジェクト<br/>保健衛生、農業、教育など生活全般の改善に携わる女性の生活改善普及員を養成すると同時に、普及員の地域開発活動を支援している。</li> <li>●8月1～3日、ビエンチャン市バクト村で有機肥料の作り方の講習会が行われた。</li> <li>●8月6～9日、ラオスで活動中のNGOと協力して“持続可能な農業”のセミナーを開催した。</li> <li>●8月20～26日、ビエンチャン県で保健衛生セミナーを開催した。</li> <li>●伝統織物保存<br/>11月初旬に行われる伝統織物展示会に向けて、主要産地で収録したビデオの編集、展示用織物のデータ整理が進められている。JVCはその資金提供を行っている。</li> </ul> | 磯田厚子, Thanongsi Solankum, Maliphet Sukkhasume (ラオス女性同盟)<br>Khamone Phetdao-heuan, Khampone Saignavong                           | UNDP, UNIFEM, RIJ, NVC, 聖ヨゼフ老人ホーム, 難民と地球の緑を考える会, グループ・カンガルー, ジャパン・タイムズ, メサイアコンサート, JVC カレンダー                             |
| <b>タイ</b><br>バンコク                                            | <ul style="list-style-type: none"> <li>①総務、会計、資金調達</li> <li>②各機関(国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体)及び東京事務所、ラオス・カンボジア・ベトナムを含む、各プロジェクトとの連絡調整</li> <li>③情報収集、広報活動、④在タイ日本人との連絡調整</li> <li>●奨学金プロジェクト<br/>家庭訪問の結果、現在も在学中の奨学金児童は85人(小学生66人、中学生19人)となり、両親の引越により退学者が増えている。</li> <li>●クロントイ図書館<br/>8月1日の母の日に、コミュニティ委員会と合同でスラムの大そうじを行い、その後青年グループ企画のイベントが行われた。</li> </ul>                                   | Pornpimol Chaiboon, Kamol Mingmuang, Manas Torkan<br>谷山博史<br><br>池島千津子, Pijig Promkaew, 主婦ボランティア15名<br><br>Samruay Jongyorklang | 全国社会福祉協議会<br>メサイアコンサート<br>Tree for lifeの会, 雄勝町町内寺院会, 国際ソロプチミスト駿河, からし種モラロジーMIRC, 国際ソロプチミスト山形, 山形中央ライオンズクラブ, 太田慈光会, JOFIC |
| カオイダン<br>(カンボジア<br>難民キャンプ)                                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>●西崎憲司記念技術学校<br/>8月12日、カオイダンよりカンボジア難民17家族28人がラオス経由で本国帰還した。<br/>ドライビングスクール(生徒47名)の最終試験を行なった。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                          | Somyot Rattanatham<br>Sutthi Netprakhon,<br>井本勝幸, 井本美奈                                                                          | UNHCR, SV (Stichting Vluchteling)<br>山形日産, 日産労連                                                                          |
| パナニコム<br>(第三国定住待ち<br>キャンプ)                                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>●日本語学校<br/>8月8日、第3グループ(4件, 16名)が大和定住促進センターへ向け出発。それにともない、最終試験とフライトオリエンテーションを実施。送別会では、ラオスと日本の料理を通じ互いの文化を体験し、交流を図った。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                   | 竹村雅義, 蘭牟田浩美,<br>鈴木彰子, 木山早織,<br>Krisda Chunlasevok                                                                               | IOM                                                                                                                      |
| ブリラム県                                                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>●農村開発<br/>8月12日、ムアンフェークの入会地で再び植林を行い、約800本の苗を植えた。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                    | Thongkham Sumruengram, Chowarite, Duangprom                                                                                     | モラロジーMIRC, JVC カレンダー                                                                                                     |



## JVCの活動とその目的に御理解を

▶ **JVCとは**—Japan International Volunteer Center  
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体  
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶ **JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には機関誌の購読料が含まれています。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 学生会員 3,000円 団体会員 30,000円)

▶ **機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所  
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい)

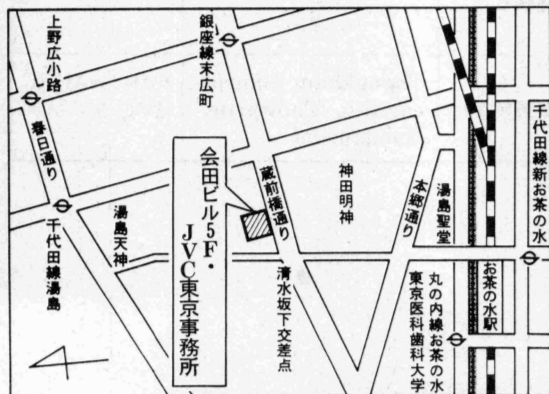
▶ **みなさまの募金が支えるJVCの活動**—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. **アフリカ難民募金** (8月小計 97,500円)  
アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. **グリーン・フォー・アフリカ募金** (8月小計 1,615,416円)  
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. **カンボジア募金** (8月小計 142,900円)  
カンボジア国内の復興のために使われます。
- D. **タイ募金(奨学金・スラム・農村)** (8月小計 370,850円)  
タイの人々の生活向上のために使われます。
- E. **ラオス募金** (8月小計 215,332円)  
ラオスの生活改善プログラムに使われます。
- F. **ベトナム募金** (8月小計 81,000円)  
ベトナム帰還者及び国内復興のプログラムに使われます。
- G. **定住難民募金** (8月小計 3,000円)  
定住難民のための日本語教材費と家庭訪問員の交通費に使われます。
- H. **環境募金** (8月小計 33,500円)  
タイ山間部で、環境を守るためのプログラムに使われます。
- I. **JVC運営経費募金** (8月小計 22,000円)  
現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. **無指定募金** (8月小計 439,393円)  
▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。  
東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい)  
加入者名—JVC東京事務所

## 編集後記

▶ 最近難民として日本にきた人の中から日本へ帰化する人が何人かでてきた。なりたくなかったというより仕方なくという人が大半である。それだけ日本では日本人であることと「外人」であることの差は大きい。しかし帰化を申請する場合、いかに自分は日本人になりたいかを一貫して示さなければならない。担当係員が家に来た時、冷蔵庫を開けてナンプラー(魚から作る醤油)を見つけて「まだこんなものを使っているのでは日本人にはなれませんよ」と言われた人もいる。

いったい日本人というのは何様なんだろうと考えてしまう。ナンプラーは家にいつも置いてあるけれど、見つかったら非国民になってしまうのだろうか。(岡村)



## 犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (8月小計 181名 1,067,040円)  
犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

Trial & Errorは再生紙を使用しています

1991年9月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 岡村達司, 前川昌代

発行人 林 達雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC) 東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎03(3834)2388 FAX: 03(3835)0519

Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (財)神奈川国際交流協会内  
☎045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。